

---

# Feel at a loss

アフエル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Feel at a loss

### 【Nコード】

N9108B

### 【作者名】

アフエル

### 【あらすじ】

暇つぶしにパソコン部内でリレー小説を書くことになりました。その小説を公開します。ストーリーが未定なので今はまだあらすじをいいません。評価していただけると幸いです。書いている人がactによって違うので描写が少しづつ違います。

プロローグ 【自他 別離】

「嗚呼ああ」

「神よ。今、お傍に」

……。

……ただ、何も変わらずに、全ての喧騒けんそうや静寂せいじゃくをすら飲み込み、  
廻り続ける世界へ。

……この、比べられない位にちっぽけな僕らから。

伝えなきゃならない想いは、ありますか？

……。

「幼き日、真理きりつを垣間見た騎士。

過去、知恵しんこの実が墮ちた世界から。

失われてしまった、回帰エデンの地へ。

「罪。俺はその言葉が嫌いだ。罪を無くす方法はないのか  
？教えてほしい……」

……。

血分けも尚、逃げ惑う乙女。

一人歩む、孤独な闇夜の深淵から。

歩みを止めた、光に満ちる朝霞の海へ。

「私は闇の中から抜け出せるのでしょうか？」

……。

木漏れ日の中、枯れ行く幼樹。

空へと、手を伸ばせない今から。

枝を広げ、日の輝きへと触れる未来へ。

「今、存在している意味は何だろうか？」

……。

巣立ちを待たず、羽を広げる雛鳥。

何も帰って来ない、朽ちた巢から。

止まり木を求める渡り鳥へ。

「本当の自由とは、なんですか？」

……。

消え行く揺らめきを、見送った篝火<sup>かがりび</sup>。

雨音から逃れられない雲の下から。

自分の傘を見つけた場所へ。

「この命は何のために一つ残されたのですか？」

……。

湖面<sup>おのれ</sup>を臨む<sup>のぞ</sup>、哀れな獣<sup>あわれ</sup>。

盲<sup>めし</sup>た目には、気付かない荒野から。

声が聞こえる、抱いた腕の中へ。

「この空っぽなわたしに、あなた達は何をくれますか？」

……。

月女神<sup>つきめがみ</sup>。

幹へと触れる手を待つ、月桂樹<sup>げっけいじゆ</sup>から。

一人ぼつちな、寂しい月へ。

「……、いるよ」

……。

己が歩む道すら知らず、今日まで歩いて来た意味すらも解らずに、明日もまた、どこかへと歩を進める。

それは恐らく、己が自身へと向けた問い、その答えも尚、いつか訪れる決意の日の為に。

しかし、今日もまた答えは見付からず、哀れな子らは歩みを止めない。そして、己が問いすらも見失う。

だが、真実は……

不変の世界に、答えなどありはしない。

春……。

別れがあり、新しい出会いもある。この季節が緋煉島ひれんとうにもやってきた。春の象徴である桜…この花びらが舞う道を一人の少女が歩いている。

少女の名は杏葉あんな…。

空は青空で周りは桜とあたり一面の陽気に包まれている。しかし杏葉の心の中は違った。時間が凍ったかのように杏葉の心の中は未だ冬であった。黒いベールに包まれ、春を見付けることができていない。

モヤモヤが心を覆っている。しかし原因がわからない。わからないからこのモヤモヤがますます積もってゆく。

(一体このモヤモヤは何?)

そう考えている内に学校に到着した。

緋煉島ひれんとう 入学式

校門にはそう書いた板が立てかけてあった。そう今日は緋煉島ひれんとうの入学式。だから杏葉も学校に来ているのだ。

校門を通り抜け少し歩くとグラウンドが見えた。グラウンドには新入生らしい少年少女が集まっていた。緊張した趣おもむきで肩慣れのしていない真新しい制服を着て…時刻は早いというのに…。

その中、一人の少女が杏葉の目についた。

その少女はとも背が低く、はつきり言って高校生に見えない。

少女は友達と楽しそうにしているが、どこか心の奥底で考え事をし

ているような、そんな気がした。

(あんな子も居るんだあ。どこの学科だろう…まっ、自分には関係ないか)

そう思いながら新入生集団の間をつまく通り抜け、教室のへと向かった。

杏葉の学校は普通科、武術科、魔導工学科の三つだ学科が1クラスずつある。因みにこの学校は島唯一の高校である。

だから学年が変わってもクラスのメンバーはあまり変わらない。変わると言えば担任ぐらいだ。

(怖い先生じゃなければいいな…)

杏葉はそう願いつつひたすら教室へむかって歩く。段々と教室に近づく。

「魔導工学科2…っど、よしここだ」

扉の前で立ち止まりふと考える。

変わり映えのしないメンバーと一日。平和なことはよい。だけどやつぱりヒマ。何か面白いことでも起きないかなあ。と期待しつつ、我にかえり扉を開けた。

「オハヨウ!!」

っと言って、自分の席 窓側の後ろから2番目 にむかった。

(ラッキー)

っと思いながら自分の席にすわる。その席からはちょうどグラウンドが見えた。そして杏葉の目には再びあの少女が映った。

（やっぱり気になるかな…。名前なんていうのだろう…）

そう思っている内に新しい担任がやってきた。

（よかった…先生怖くなさそう）

杏葉は一安心し、再び窓の外に目を向けた。  
だがそこにはもうあの少女はいなかった。

（また会えるかな？）

そんなことを思いながら、杏葉の学校生活は始まっていった。

act I 【常葉莉緒】

杏葉あんなの登校と同刻。グラウンドにて

少女は思う。

あれは誰？

また思う。

ボクを見ているのは、誰？

「…緒？ ど…し……莉緒？」

声が聞こえる。しかし、また思う。

誰なの？ 答え

「莉緒！！」

「ひゃうっ！！」

声は先ほどより強く、思考は停止。

すっとんきような声をあげて飛び上がったしまった。

「もう 何ボーツとしてんの？」

「ゴ、ゴメン……。あっちだったよね？」

声の主は隣に居た少女。少しムツとした表情をしている。

少女 莉緒は、謝り、列につこうと確認した。

隣の少女は「うん」と言って首を立てに振った。「ありがとう」と微笑み、莉緒は歩き出す。向かう先には“まどろっこがか魔導工学科”の文字。プラカードのようなものが立っていた。

(……みんなおっきいなあ)

そんな事を思いながら列につく。実際は自分が小さすぎるだけという事は棚に上げて。

また、視線を感じた。

先ほどと同じ事を何度も自問している内に、移動は始まっていた。

「まずは武術科ぶじゅつかから入ってください」

前に立っている先生が大声で指示をとばしている。それを各科の先生は聞き、体育館へと案内すれ。別に案内している先生が担任というわけではないらしい。担任は式で発表されるまで秘密だと莉緒は聞いていた。何かサプライズのつもりかな、などと家で聞いた話を思い出し、ぼんやりと考えてみた。

その思考の合間にふと見えた少年。

なにやら銀色のものを付けた、不思議な感じの少年。莉緒は何故か近い感じがしたが、すぐに振り払った。

(ボクと近いわけないじゃん。だって男の子だし……)

などと考えて。いや、考えることによって、下らない、下らない、と自分に言い聞かせ、前を向いた。

「魔導工学科の人、入って下さい」

ちょうど時間だったらしい。前の人について、利緒も歩き出した。

移動中も様々な事を考えていたが、どれ一つとして答えは出なかった。

式も無事終わり、担任に連れられ、教室へと向かう。

すでに何人かの人話をして、顔もかすかに覚えた。人見知りの激しい莉緒は自分から話しかけることはできない。だから、話したと言っても全部話しかけられたのだった。

何分、容姿は逆の意味で目立つ。「ちっちゃくてカワイイ」と今まで散々なぶり物にされてきた。今回もそのパターンである。教室に行ったらすごいんだろなあ、と思いつつ、だんだんと重くなる足えお引きずりながら、歩くのであった。

「ここが教室です。早く覚えて下さいね。」

莉緒の心の中など露知らず。担任は無駄に明るく元気に言った。皆、内心では「小学生でもあるまいし」と思っているだろうと勝手な推測をしつつ、教室へと入る。

席には律儀なことに名前を書いた紙が貼ってあった。莉緒の席は窓際の最前列の席だった。

(黒板見るのに苦労しなくて済みそうだね)

少しズレたことを考えながら席につく。そして、窓の外を眺めてみる。見えたのは、近くにある花壇とその奥の林。林には桜の木もわずかながら混ざっているらしく、所々に淡いピンクの花が見える。それは、深い緑の中でよく映えて。まるで、自分のようで。周りとは違う、自分のようで。

見入っている内に、予想通り包囲されたいた。

「もうやめてえー!!」

叫ぶも虚しく、誰も聞かず、されるがままとなった莉緒であった。

a c t I 【英蓮華】

入学式が終わり、皆が教室に向かっている頃…

蓮華<sup>れんか</sup>もまた、教室に向かっていた。

（…くそつ、学校とかめんどいなあ…。今年から、紫月<sup>しじつき</sup>とも学科はなれたし…。誰をいじめて、ストレス発散すればいいんだあ。）

蓮華<sup>れんか</sup>は、こう思いながら教室の中に入った。

「え〜つと、座席は…、1番後ろの窓際かあ」

蓮華は、自分の座席に行つて座り、辺りを見回した。

（うわあ、みんなゴツいなあ……。てか、私なんて武術科なんか受けたのかなあ…）

蓮華は思っていた。

窓から外を見れば、武術科の先輩たちが、武術の練習をしていた…

（朝っぱらから、よくやるなあ…。私には、こんなに熱心にやるのはムリだ…。）

武術科の朝は、とても早いらしい…。6時頃には、全員が登校し、武術の勉強、そして、練習をしている。

更に、一番早い人は、5時前に登校しているらしい…。

しばらくして、先生が教室に入ってきた。

先生の話聞きながら、蓮華は再び教室内を見回した。

（友達が1人もいねえ…）

蓮華の友達はとても少なく、紫月とあと2人のみだった。しかし、3人とも学科がはなれてしまって、蓮華は、1人になってしまったのだ。

こうして、蓮華の学校生活は始まった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9108b/>

---

Feel at a loss

2010年11月26日07時04分発行